

四日市市立山手中学校 3年 西原 朋佳「未来に渡す三重県」

今年、三重県は誕生して百五十年を迎えた。百五十年という時間を思うと、私は少し不思議な気持ちになる。目の前にある景色は当たり前のようにそこにあるけど本当は長い時間の中で、たくさんの人が守り、つないできたものなのだと気づいたからだ。

私は三重県で育った。熊野の森の深さ、伊勢神宮の静けさ、志摩の海の広さ。それらは昔から変わらない風景に見える。しかし、伊勢神宮の式年遷宮を知ったとき、私はその考えを改めた。二十年ごとに社を建て替えるために木を育て、技を受け継ぎ、人が関わり続ける。古いものを残すために、新しくする。その姿は、三重県が百五十年続けてきた生き方そのものだと感じた。自然では、山が荒れれば川が濁り、海にも影響が出る。三重県では、自然と人の暮らしが切れ目なくつながっている。その中で生きる私は、この県が「誰かの努力の上で成り立っている」ことを実感している。百五十周年は、ただ過去を祝うための日ではない。これから先へ何を残すのかを考える節目だと思う。便利さだけを追うのではなく、手間をかけ、思いを受け継ぐこと。その価値を私は未来の三重県民に伝えたい。

少し先になると社会は大きく変わっているだろう。それでも三重県には、「受け継ぐ」という大切さを残してほしい。私は三重を生きた証を未来へ伝えられる人になりたい。この県が百五十年続いてきたのは、守ろうとした人がいたからだ。次の時代も三重県が三重県であり続けるために、今を生きる私たちがその一歩を踏み出す番なのだ。